

個に応じたキャリア教育を実現するための ファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅧ

— 社会人基礎力を涵養するためのアクティブラーニング —

A Trial Study of Faculty Development to Provide All Types of Students
With Vocational Education Geared to Their Abilities Ⅷ

玉田 和恵*・神部 順子**・八木 徹***・山口 敏和****・
重藤 暁*****・松村 豊子*****・古里 靖彦*****

概 要

本研究では、学生の基本的な生活習慣の確立、社会人としての厳しさに耐えるための心構え、人間性を育むための心の教育、問題解決力・チームで働く力を伸ばすための教育を実践してきた。本稿では、これまでに情報文化学科で実施してきた個に応じたキャリア教育を実現するための取り組み及び2015年度に新しく取り組んだ内容について、アクティブ・ラーニングの視点から検討する。特に、大学に求められている「『答えのない問題』を発見しその原因について考え、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力」を鍛えるためにはどのような指導法及び活動が適しているか、実践を通して効果検証を行う。

1. はじめに

1.1 問題解決力育成の必要性

グローバル化や少子高齢化など社会の急激な変化は、我が国社会のあらゆる側面に影響を及ぼしている。雇用構造や労働市場の変化も加わった先の見え難い今の時代を生きる若者や学生にとっては、大学における学修が、自らの人生を拓き、個人として発展する基盤となるかどうか極めて切実な問題である。

大学において、「答えのない問題」を発見しその原因について考え、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えることにより、「生涯学び続け、どんな環境でも勝負できる能力」を育むとともに、実習や体験活動などを伴う質の高い効果的な教育により知的な基礎に裏付けられた技術や技能を身に付けることが、学生が自らの人生を切り拓くために大変重要である。

それを実現するためには、学生同士が切磋琢磨し、刺激を受け合いながら知的に成長することができるよう、課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）など、学生の思考や表現を引き出しその知性を鍛える双方向の教育が重要である（文部科学省 2008）。

一方、企業社会はどのような人材を求めているのであろうか。経済産業省では、「企業が採用時に重視する能力」や「経営者が欲しい人材像」に関する調査等を踏まえて、表1のように12の要

2015年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科教授 教育学

** 江戸川大学 情報文化学科教授 情報科学

*** 江戸川大学 情報文化学科准教授 情報化学

**** 江戸川大学 情報文化学科専任講師 情報工学

***** 江戸川大学 情報文化学科非常勤講師 情報数学

***** 江戸川大学 情報文化学科教授 英語学

***** 江戸川大学 情報文化学科教授 eビジネス

素で構成される3つの能力を含む社会人基礎力を育成することが重要であると提言している（経済産業省 2007）。

近年、企業現場では、新しい価値を創出するための課題の発見、解決に向けた実行力、異分野と融合するチームワークなどの能力が強く求められている。また、従来、社会人基礎力として挙げられている能力については、家庭や地域社会、部活動や集団活動などにおいて自然に育成されるもの

であったが、家庭や地域の関係の希薄化、教育力の低下などから、これらを自然に身につけることは非常に困難な状況になっている。そこで、これらの力を社会に出る前の段階で育成することも大学教育に求められているのである。しかし、これら社会人基礎力は、基本的な生活習慣が身につく良識ある人間性と、基礎学力や専門知識が備わった人材にプラスアルファとして求められるものである。

表1 社会人基礎力の3つの能力・12の要素（経済産業省（2007））

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 （アクション）	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力 （シンキング）	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力 （チームワーク）	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々と物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力



図1 本学科のキャリア教育に必要な3つの視点（心・技・体）

1.2 情報文化学科の教育目標

情報文化学科では学生個々の特性に合わせたキャリア教育を実現するために、学生の人間性・社会性、教養を高めるための全人格教育を9年間に渡って実施している。情報文化学科の教育目標は以下の通りである。

①人間性を磨く

(ア) 人間としての在り方や生き方について考えさせ、人と関係を作る力、自己をコントロールする力を育成する

(イ) さまざまな課題を発見し、取り組み、問題解決する力を育成する

(ウ) 情報を収集・分析し、社会の動きを見据えて現実を正しく理解し判断することが出来る力を育成する

②感性を磨く

(ア) 感性を磨いて、自分の意図を相手に伝えることができる表現力を育成する

③学力を磨く

(ア) 基礎学力・専門性を磨いて、業務処理に対応できる実践力を育成する

上記の目標を達成し、キャリア形成に向けた教育を実現するために、学生の目的意識や現実社会の厳しさを理解させる「動機付け（心）」、自分の目標とする職業に就くための就業力を育成する「テクニック（技）」、大学教育で専門性を育成するための「自分を鍛える（体）」という3つの視点（図1）で、授業や授業外の様々な活動でITと対面での徹底指導を行っている。

1.3 本研究の目的

本稿では、これまでに情報文化学科で実施してきた個に応じたキャリア教育を実現するための取り組み及び2015年度に新しく取り組んだ内容について、アクティブ・ラーニングの視点から検討する。特に、大学に求められている、『『答えのない問題』を発見しその原因について考え、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力』を鍛えるためにはどのような指導法及び活動が適しているか、実践を通して効果検証を行う。

①『答えのない問題』を発見しその原因について考え、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えるための指導法を検討する

② アクティブ・ラーニングの視点から情報文化学科で行っているキャリア教育を含めた全人格教育を分析する

2. アクティブ・ラーニングの取り組み

アクティブ・ラーニングとは、「思考を活性化」する学習形態を指す。具体的には、実際にやってみて考える、意見を出し合って考える、わかりやすく情報をまとめ直す、応用問題を解く、などいろいろな活動を介してより深く理解したり、実際にできるようになることを目指す学修活動である。

山地（2014）は、アクティブ・ラーニングについて図2を示して次のように解説している。第I象限と第II象限にあるものは比較的高度なアクティブ・ラーニングであり、医学系の問題基盤型学習（Problem-Based Learning）のように臨床的推論能力の育成を主な目的とするものもあれば、工学系のものづくり実習や経営学系のビジネス実習のように、特定のプロジェクト活動を通して問題解決能力の育成を目指すものもある（Project-Based Learning）。実践準備には多大の労力を要する。第III象限や第IV象限にある授

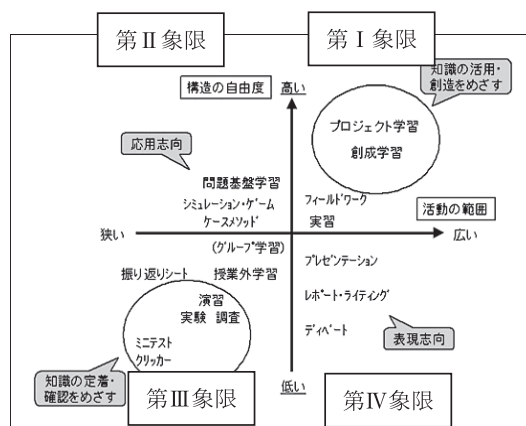


図2 アクティブ・ラーニングの多様な形態

業は「思考を活性化する」ことを目的としており、時間を短く区切りながらクリッカーなどで対話的な要素を組み込んだり、学んだ知識や技能を活用する時間（説明し合う、演習問題に取り組むなど）を入れたり、シミュレーションゲームなどを活用することで、講義形式でもある程度アクティブ化を可能としている。

3. アクティブ・ラーニングの取り組み

本章では、情報文化学科での学びの特質について、前章図2のアクティブ・ラーニングの分類を基に整理する。

3.1 知識の定着・確認を目指す授業実践

(図2. 第Ⅲ象限)

情報文化学科では、通常の座学授業の中にもアクティブ・ラーニングを多く取り入れている。例えば、1年後期の必修授業である「情報文化基礎」では、前半は学園祭の企画や運営を中心に、リーダーを核とした活動を行い、後半は、情報・語学・ビジネスなど専門分野の学び方について、「座学→ゼミ単位での話し合い→学科全体での発表」という流れでアクティブ・ラーニングを実践している。

「座学」では、情報文化学科の学びの目的を、教員の話や講義として聴くだけでなく、ワークシートに要点を整理しながら学習する。次の「ゼミ単位での話し合い」では、4人程度のグループで、それぞれの専門分野について、自己の学修目的・将来の仕事や資格取得を結び付けながら話し合う(写真1)。その際に、話し合った内容について、次回の全体会で発表する者を決めておく。「学科全体での発表」では、各グループの代表者が1年生全員の前でグループで話し合った結果について発表する。この活動では、必ず全員が発表することになるため、どんなに内気な学生もグループの意見を代表して全員の前で発表する。

3.2 表現志向に力を入れた授業実践

(図2. 第Ⅳ象限)

表2 情報文化基礎の授業の流れ

第1回	全体	共通テスト 履修確認
第2回	全体	今後の生き方を考えるための講話
第3回	全体	学園祭企画討議
第4回	全体	学園祭作品作り
第5回	全体	学園祭事前準備
第7回	全体	情報コミュニケーションの学びについての講義
第8回	個別	情報の学びに関する個別討議
第9回	全体	発表+国際コミュニケーションの学びについての講義
第10回	個別	国際の学びに関する個別討議
第11回	全体	発表+ビジネスの学びについての講義
第12回	個別	ビジネスの学びに関する個別討議
第13回	全体	発表+1年間の学びの総括
第14回	全体	2年次以降の専門科目の学びについての講義
第15回	全体	2年次以降の学習目標の設定



写真1 テーマについての話し合い



写真2 全学生の前での発表の様子

プレゼンテーションを中心としたアクティブ・ラーニングを実践している授業には、「プレゼンテーション論」「プレゼンテーション演習」などがある。今期「ネットワーク社会論」では、アク



写真3 担当内容のプレゼンテーション

ティブ・ラーニングの手法を検討するため、教師の講義を最小限に留め、学修内容を学生自身が分担して調べ、プレゼンテーションする形態を実験的に行っている。ネットワーク社会論の学修内容40分野について資料となる教材を提示し、誰がどの分野を担当するか割り振りを行う。各分野を数名が担当することとし、それぞれの学生は5分野程度を分担することとした。毎回の授業では、担当学生が、それぞれの分野について詳細に調べ、プレゼンテーション資料を作成し、発表を行っている。

受講学生にアンケート調査を実施したところ「自分で調べて発表するので、話を聴くだけより勉強になる」という学生が、「非常にそう思う」36%、「そう思う」39%と多くいた。

具体的な感想を自由記述で求めたところ以下のような回答が得られた。

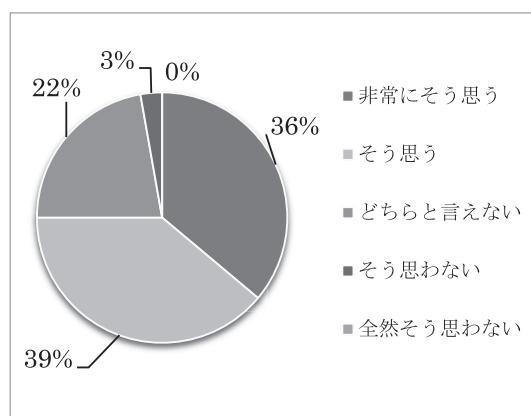


図3 自分で調べて発表するので、話を聴くだけより勉強になると思う

- ・積極性を養うことができると思う
- ・ただ話を聞く以外での様々な視点を持つことができた
- ・自分で調べるのは記憶に残りやすい
- ・発言力、積極性などを身に着けることができた
- ・プレゼンテーション能力を身に着けることができる
- ・教科書だけでなく、様々なサイトで調べるので、情報収集能力も身に付いた
- ・座学の授業よりも、理解しやすく記憶に残りやすかった
- ・一つのテーマについて複数人から話を聞くことができ様々な見方を知る学修ができた
- ・毎週のように発表するのでよい練習になった
- ・人によってまとめ方や話のオチの付け方が違うので面白く、自然と勉強になった
- ・効率良く調べる方法と、まとめる能力が身に付き、人前で発表することに慣れるため、一石二鳥だと思った。

3.3 朝の挨拶と自主学修

(応用志向：図2第Ⅱ象限)

情報文化学科の大きな特色である「朝の挨拶」は図2のアクティブ・ラーニングの定義では第Ⅱ象限の応用思考に分類されるのではないかと考えられる。

学生は、最初は教師から誘導されて朝の挨拶を始めるが、次第に朝の挨拶をすることの意義を自分から見出し、社会に出るために必要となる学修を自主的に始めるようになる。写真4は情報文化学科教員の研究室があるA棟7階の毎朝8時前後の挨拶の様子である。写真5、写真6は学生が自発的に開始した朝と夕方の自主学修の様子である。

3.4 学外活動での学び

(応用志向：図2第Ⅱ象限)

情報文化学科では、授業で学んだことを活かして社会と繋がるための多くの実践を行っている。

(1) 日本棋院学生囲碁大会出場

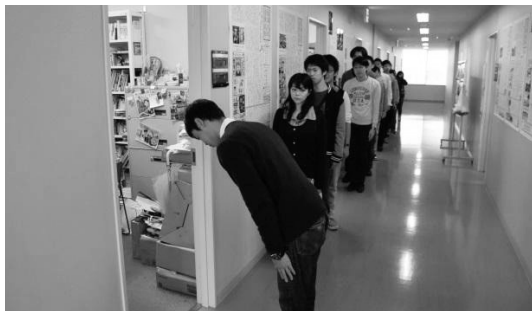


写真4 朝の挨拶



写真7 日本棋院学生囲碁大会出場



写真5 朝の自主学修



写真8 インターネット協会手記コンクール参加（入賞）



写真6 夕方の自主学修



写真9 私立大学情報教育協会社会スタディへの参加

ロジカルシンキングの授業で学んだ囲碁による問題解決力を試すために、代表7名が日本棋院主催の学生囲碁大会に出場した(写真7)。東京大学、一橋大学、早稲田大学など日本棋院による授業を実施している著名な大学の学生ばかりであった。そこに参加した本学科学生は大いに健闘し、ある女子学生は一橋大学の学生を打ち負かした。

(2) インターネット協会手記コンクール入賞

日頃、ネット社会の望ましいあり方についてさまざまな授業で学んでいる情報文化学科では、毎年インターネット協会が実施している「インター

ネットにまつわる手記募集」に応募している。部門は以下の4つである。

- 1) インターネット使いこなし部門
- 2) インターネットトラブル克服部門
- 3) 親子のルール作り部門
- 4) 青少年のインターネット利用部門

8名の学生の手記が入賞し、江戸川大学にインターネット協会の方が来られて表彰式が行われた(写真8)。学生は、授業や様々な学科の活動で学んだことを活かして、ネット社会が健全に発展するためのさまざまな提案を行い、それが評価され

たのである。

(3) 私立大学情報教育協会

社会スタディへの参加

私立大学情報教育協会が主催する「未来を切り拓く志を支援する『社会スタディ』」にも毎年参加している。これは次代を担う若者が社会の発展に向けたイノベーションに取り組むことの重要性に気づき、発展的な学びが展開できるようになることを目的として、各界から著名な有識者を招き、講演と討議をする活動である。今年度の内容は以下の通りであった。

①グローバルでのコミュニケーションインフラへの挑戦

LINE 株式会社 代表取締役社長 森川 亮 氏

②イノベーションに求められる学び

東京大学大学院 情報学環長 教授 須藤 修 氏

③利用者視点での新たな価値創造と ICT

富士通株式会社 知的財産権本部 西川 仁 氏

④若者はグローバル時代にどう対処すべきか

慶應義塾大学 環境情報学部 村井 純 氏

⑤気づきの働きかけ 参加有識者全員

⑥気づきの整理と発展

学生は、有識者の話を聴き、他大学の優秀な学生とディスカッションすることにより、イノベーションへの意欲や情況把握力、働きかけ力などさまざまな生きる力を学び取った（写真9）。

3.5 情報文化学生瓦版（新聞作成）

（知識の創造・活用を目指す：第1象限）

社会人として必要となる「チームで仕事をする力」の中で、創造的な仕事を仲間と共に作り上げていく力を育成するために、情報文化学科では、さまざまな学科イベント実施後に情報文化瓦版という学生新聞を作成する取り組みを行っている（図4）。

どのような記事にするかという目標を設定し、主体的に相手に働きかけながらアイデアを出し合い、誰が読んでも興味関心が湧くような紙面づくりを工夫している。イベントが終了すると今回の担当者の人選を行い、編集長、記事担当、天声人語担当、4コマ漫画担当、広告担当などの割り



写真10 議論しながら新聞を作成する様子



写真11 新聞が掲示されているA棟7階

今年も情報文化は大盛況!! 第9回駒木祭

情報文化学科 学生瓦版 2015年11月10日 第70号

発行 情報文化学科 学生瓦版編集委員会

学生 千歳 16 9
東京 18 10
長崎 19 11
香川 16 7
静岡 19 10

11月14日 15日
サイエンスアゴラ開催!

情報文化で最新の
バーチャルリアティ
ーを体験しよう!!

江 戸 川 大 学 一部0円、費用0円、制作機材配布パソコン

図4 情報文化学生瓦版学園祭号

振を行う。原稿は3日以内に作成し、学生間で校正をした上で、教員の添削を仰ぐシステムになっている。1週間以内には刊行し、大型印刷をした上で掲示する。短時間での作業になるので、お互いの連携が重要であり、緊密に連絡を取り合いながら、作業分担を行っている。社会人基礎力の3つの能力・12の要素として挙げられている力を全て活用して行う活動であり、まさに高度なアクティブ・ラーニングとなっている（写真10 写真11）。

3.6 学生の運営力

（知識の創造・活用を目指す：第1象限）

情報文化学科には学生が主体的に企画運営し、学外に飛び出してさまざまな人々と連携して行う活動がある。サイエンス関係の活動も多く、依頼を受けて小学校への出前サイエンスセミナーなどを実践し、社会人基礎力としての「前に踏み出す力」「チームで働く力」を身につけている。今年度は、以下の活動を実践した。

- ・サイエンスセミナー
- ・サイエンスアゴラ



写真12 小学校での出前サイエンスセミナー



写真13 学生が小学生に説明する様子

- ・東小学校の出前サイエンスセミナー（写真12 写真13）
- ・長崎大学でのプレゼンテーション
- ・田上富久長崎市長との懇談

5. 2015 年度実践報告

2015年に実施した活動について、項目及び概略のみを以下に提示する。

5.1 高大連携の取り組み

- ・千葉県高等学校協議会（校長会）
管理職対象「インターネットと人権」
- ・千葉県高等学校
人権・同和教育部会春季研究協議会
「人権教育と情報モラルの指導について」
- ・千葉県社会人権教育指導者養成講座
「学校で情報モラルをどう指導するか」
- ・千葉県教育情報化推進リーダー養成研修
「学校教育と情報モラルについて」
- ・千葉県 ICT 活用リーダー研修
「視聴覚教育と情報通信技術」
- ・キャリア教育就労支援等の充実事業
関宿地区教員研修
「個に応じたキャリア教育の実践」
- ・千葉県立東葛飾高等学校 教職員対象
「インターネットと人権教育の在り方」
- ・千葉県立津田沼高等学校
保護者対象「情報モラル講座」
- ・仙台市教育センター 10 年経験者研修
「子供を取り巻く今日的課題」
- ・千葉県立船橋啓明高等学校
全生徒・教職員「インターネットと人権」
- ・千葉県立柏中央高等学校
全生徒・教職員「インターネットと人権」
- ・千葉県立小見川高等学校
生徒対象「ようこそ！パソコンの世界へ」
- ・我孫子二階堂高等学校
生徒対象「ようこそ！パソコンの世界へ」
- ・千葉県長生郡長柄町
小・中学校・こども園の教職員対象

「情報モラル講座」

5.2 社会人招聘授業・インターンシップ

今年度、情報文化特別講義Ⅲに招聘した方々は以下の通りである。

伊藤 満	ティ・オー・エス代表取締役社長
藤原誠一	野村證券 金融公共公益法人部
佐川英美	ヤフー株式会社 コーポレート政策企画本部 ネットセーフティ企画室 渉外企画
岡部正勝	慶応義塾大学総合政策学部教授 【警察庁からの出向 元警察庁生活安全局情報技術犯罪対策課長】
高橋大洋	ビットクルー株式会社 インターネット 利用者行動研究室 室長
五味史充	日本郵政株式会社 グループ IT 企画部長
岡宅 泰	千葉銀行 人材育成部 人材サポートグループ (採用担当) 調査役

特別講義に招聘した方々は以下の通りである。

池田晶子	SHOKO NEW YORK 代表
イアコム チオ美穂	翻訳業、通訳業（英語、フランス語、イタリア語）、 インターネット事業支援業
北村隆志	前内閣官房内閣審議官 兼 国土強靱化推進室次長
藤田純司	AJS 株式会社 代表取締役会長
三木明博	文化放送代表取締役社長
齋藤正視	丸紅建材リース株式会社常務
高妻孝光	茨城大学 大学院理工学研究科 応用粒子 線科学専攻 教授

インターンシップについては、以下の企業の皆さまにお世話になった。

文化放送 JCN コアラ葛飾 JCN 市川 JCN 船橋習志野 文化放送 ティ・オー・エス 松屋フーズ	NHK メディアテクノロジー 東京メトロ アライドテレシス 千葉銀行 H・I・S AJS
---	---

5.3 学科イベント

今年度、開催した学科イベントは昨年同様、以下の通りである。

- ・サイエンスセミナー
- ・情報教育研究会
- ・英語教育研究会
- ・秋葉原オープンキャンパス
- ・企業訪問（花王川崎工場）（写真 14）
- ・インターンシップ
- ・長崎研修・ニューヨーク研修



写真 14 花王川崎工場訪問

6. まとめと今後の課題

本稿では、これまでに情報文化学科で実施してきた個に応じたキャリア教育を実現するための取り組み及び 2015 年度に新しく取り組んだ内容について、アクティブ・ラーニングの視点から検討した。特に、大学に求められている、「『答えのない問題』を発見しその原因について考え、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力」を鍛えるためにはどのような指導法及び活動が適しているか、実践を通して効果検証を行った。

情報文化学科では、情報文化学生瓦版・サイエンスセミナー・秋葉原オープンキャンパス・学園祭運営など高度なアクティブ・ラーニングによる実践を日常的に行っている。これは Project-Based Learning に分類されるものであり、社会人基礎力として求められている「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を育成することに高い効果を示している。

アクティブ・ラーニングの視点から情報文化学科で行っているキャリア教育を含めた全人格教育

を分析した。朝の挨拶をはじめ基本的生活習慣、人としてのモラル・マナーの涵養など、日常生活の中に密着した全人格教育を目指したアクティブ・ラーニングが学生の成長に効果を示している。これは、卒業生が入社した多くの企業担当者から「情報文化学科出身の学生は、礼儀・マナーが身についており、チームで働く高い力を持っている」と高く評価していただいているところからも示唆される。

今後は、あらゆる授業や学科活動の中で、『答えない問題』を発見しその原因について考え、最善解を導くために必要となる力を育成することができる指導法をさらに追求する必要がある。

謝 辞

本研究は平成 27 年度学内共同研究「問題解決力・チームで働く力を向上させるためのキャリア教育指導法の研究」の支援を受けて行った。関係各方面の皆様へ感謝いたします。また、本研究にあたって、さまざまな方々の協力をいただいた。特別講演会にご協力くださった皆さま・長崎の皆さま、ニューヨークの皆さま、活動を支えてくださった江戸川大学教職員の皆さまに心から感謝の意を表します。

参考文献

- 経済産業省 「社会人基礎力に関する研究会 中間報告書」
<http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-reference.pdf> (参照日 2013 年 11 月 10 日)
- 国立教育政策研究所 (2007) 「キャリア教育への招待」, 東洋館出版者, 東京
- 文部科学省 (2000) 「大学における学生生活の充実方策について (報告) - 学生の立場に立った大学づくりを目指して -」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm
 (参照日 2014 年 11 月 15 日)
- 文部科学省 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答 申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm
 (参照日 2015 年 11 月 30 日)
- 文部科学省 (2013) 「平成 24 年度大学等卒業者の就職状況調査」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/05/1335098.htm (参照日 2013 年 12 月 3 日)
- 文部科学省 (2014) 「学生の中途退学や休学等の状況について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1352425.htm (参照日 2014 年 11 月 27 日)
- 文部科学省 (2014) 「学校基本調査 - 平成 26 年度 (速報) 結果の概要 -」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/attach/1350731.htm (参照日 2014 年 11 月 27 日)
- 私立大学情報教育協会 「大学における教養教育」大学教員の授業改善白書 http://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2324/3_1.html (参照日 2014 年 11 月 15 日)
- 総務省統計局 「労働力調査」
<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/zuhyou/05401.xls> (参照日 2010 年 11 月 30 日)
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・古里靖彦 (2008) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組み」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 19, 293-303
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・八木徹・波多野和彦・古里靖彦 (2009) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅡ - 人間力を育成するための教養教育を目指して -」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 20, 203-212
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・八木徹・波多野和彦・古里靖彦 (2010) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅢ - 職業人との関わりを通じた成長 -」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 21, 245-257
- 玉田和恵・神部順子・八木徹・古里靖彦 (2011) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅣ - 基礎学力の向上を目指して -」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 22, 21-30
- 玉田和恵・神部順子・八木徹・城一道理・近藤益世・松村豊子・古里靖彦 (2012) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅤ - 基礎学力と行動力の向上を目指して -」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 23, 13-24
- 玉田和恵・神部順子・八木徹・城一道理・近藤益世・松村豊子・古里靖彦 (2013) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅥ - 基礎学力と行動力の向上を目指して -」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 23, 13-24
- 玉田和恵・神部順子・八木徹・近藤益世・松村豊子・古里靖彦 (2014) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅦ - 問題解決力・チームで働く力の育成を目指して -」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 24, 315-328
- 玉田和恵・神部順子・八木徹・重藤暁・松村豊子・古里靖彦 (2015) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅧ - 不登校・退学者の防止と基礎学力の徹底向上を目指して -」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 25, 273-288
- 山地弘起 (2014) 「アクティブ・ラーニングとはなにか」 大学教育と情報, 2014_1, 2-7